

ACT VI 「ラムダの歴史」

地球からはその存在さえ知られていない遠く離れたところにその島宇宙があった。クロスからだ約200光年という距離にあるその島宇宙のほぼ真ん中付近に存在するノビ星系。その中心恒星であるノビは薄赤く燃える星、赤外線と特殊α線を微弱に出している。そして、そのノビの周りを周回する7つの惑星。

内側から数えて3番目、外側から5番目の軌道を回る第三惑星ラムダ。ノビからの特殊α線によって赤く輝く様は、宇宙に投げられたルビーと人々から呼ばれていた。

そのラムダには多種多様な生物が生まれながら、なぜか知的生物と呼ばれるものが存在せず、ラムダの主権は一部の小動物と植物が互いにその領域を主張し合っているというようなものであった。しかし、スエルズ年代に入ってから、別の星系にあるクロスより一台の探査艇がやってきたことからこの様相がまさに大きく変わってしまったのだ。

その頃、爆発的な人口増加に苦しんでいた惑星クロスは、環境が似ていると思われた各星系に殖民可能な星を捜すために探査艇を飛ばし、その結果ノビ星系の第三惑星ラムダに可能性を見出したのだった。しかし、当初ラムダには平地がほとんどなく、必要物資を送り込もうにもシャトルが着陸するには大きな障害になっていた。そのため前線基地の意味合いも込めて、ラムダの周りを周回する13の衛星から2つの衛星を選び出し、まずはその2つの衛星に殖民国家を建国した。その2つの衛星に最初に降りたった者こそ、ブルー・アクサリとレスター・バライナという若者だったのだ。

まだ名前も付いてなかった2つの衛星は、殖民した二人の名前をそれぞれ取って、アクサライト、バライネールと名付けられ、2人の若者はそれぞれの衛星の統治官となって長い年月をかけ、殖民国家を創りあげていくことになる。本国のクロスではその結果に対し大いに満足し、残りの11の衛星にも次々と統治官を送り込み殖民国家を増やしていった。

そして、初めて探査艇がラムダに降りたってからちょうど10年後、惑星ラムダの統治権を巡って第一次衛星国家間戦争が勃発する。2年もの間、13の国家間で戦争が行なわれた結果、本国クロスではこの戦争に対し一切の援助を打ち切ったと同時に、新たに発生した次元断層の処理で手いっぱいとなり、第一次衛星国家間戦争は完全にクロスとは政治的にも文化的にも切り離された形で突き進むこととなってしまった。これにより、13の衛星国家はますます戦いに没頭し戦火はさらに広がる結果となる。

戦争が始まってから4年半が経過した頃、本国のからの物資供給を断たれ、もともと物資の乏しい11の国家は次々と降参し、それぞれアクサライトとバライネールの傘下に入っていった。そして、物資、戦力には勝るものの同盟国を集めることができなかったアクサライト側が、7つの同盟国を従えたバライネール側に最後の戦いで大打撃を受けて敗北を認め、ここに初代ラムダ王レスター・バライナ・ラムダが誕生したのだった。この時、バライネールの同盟下にあった7つの国家はそれぞれ公爵の地位を名乗り、残りの5つの国家を支配下に置くことになった。

その後、ラムダの国家建設はレスター・バライナの手腕により順調に進み、約10年の歳月のもとラムダは本国クロスにも劣らぬ立派な惑星国家に変貌したのだった。レスター・バライナはバライネールを自治区とし、政治の中心を全面的にラムダに移し、正式に7つの同盟国とともにラムダ王制共和国を建国することとなった。ここに25年にも渡るクロスの殖民計画は一応の完成形を見

ることになる。人々は未来永劫ここが安住の地となることを信じてやまなかった。

「ちょっと、アクサリ家が王家なんじゃないの？」

「初代の王家はバライナ家だったのですよ。それも今回の事件を複雑にしている理由の一つなのだと思います。」

「ねえねえ、今の話して何年くらい前の話し？」

「ラムダの時間で僅か60年ほど前の話しです。それに実は戦争はもう一つあったのですよ。」

この頃、アクサライトの一部の科学者の間から、ノビから放射される特殊 α 線が人体に影響を与えるという報告が出されていた。それはほんの些細なことから見つけたものだったが、ほとんどの科学者が見逃した中、アクサライトの科学者だけがその可能性に気づき敗戦の色が強く残る研究所で実験を繰り返していた。ブルー・アクサリもその実験結果に着目し、詳しい研究報告の提出を求めると同時に本国クロスに対してもこの報告を伝え援助を要請していた。

実はこの時の研究結果が、次の戦いに大きな影響を与えることとなったのだった。ブルー・アクサリもまさかこの結果を戦争に役立てようと思った訳ではなかったし、長年の戦争でどの国も疲れ果てており、再びこの地に戦火が放たれるとは考えていなかったのである。しかし、ようやく人々が渴望しようやく掴んだ平和は、レスター・バライナの崩御という形でもろくも崩れ去ることになった。ラムダ王制共和国は崩壊し、再び13の衛星国家は戦いに身を投じることとなり、ここに第二次衛星国家間戦争が勃発した。それは第一次衛星国家間戦争が終結してから僅か3年目のことだった。

それはほんの些細なすれ違いから始まったと言ってもいいだろう。初代ラムダ王の崩御とともにその長男であるガイノアール・バライナが2代目ラムダ王として即位を宣言したのだが、いかんせん彼はまだ若く初代ラムダ王ほどの人望もなかった。即位式での暴言が引き金となって、同盟を外れると言った声が各国で大きくなることに対し、武力でもってそれを無理やり押さえつけようとしてしまったのである。その結果、ラムダ王制共和国から脱退する同盟国が相次ぎ、ラムダは一時的に孤立状態となってしまった。このチャンスを見逃す筈の無いブルー・アクサリがバライナールに奇襲をかけ、それが第二次衛星国家間戦争のきっかけとなった。

この戦争は最初から足並みの揃わぬ同盟国側に対し、アクサライトの投入した新しい武器が思った以上の効果を発揮し、なんと僅か1週間で決着がついてしまった。もっとも、その新しい武器が無かったとしても結果はあまり変わらなかつたろうと言われているが…。

同盟国側はその新しい武器を神の手と呼んで怖れた。しかし、それこそがアクサライトの科学者が発見した特殊 α 線の効果だったのである。長年、この特殊 α 線を浴び続けた者は、その潜在能力を100%引き出すことができ、ある者は精神感念、ある者は瞬間移動、また今回の戦争でとくにその力を発揮することとなった念動力などが、次々と明らかにされたのだった。しかし、実際のところ、ブルー・アクサリはそこまでの内容をクロスには報告していなかった。従って、クロスの歴史の中ではこの戦争が1週間で終結したことについては謎としている。

やがて、ブルー・アクサリが3代目のラムダ王として宣言を行ない、アクサリ家が王家となり、その他の12の衛星国家を公家として現在のラムダ共和国を建国した。以前よりアクサリ側についていた4つの衛星はバライナ側の同盟国と同一視されることを強く反対したが、3代目ラムダ王はいっこうに取り合おうとはしなかった。

「ということは、この星の住民は全員が能力保持者ということなの？」

「全員という訳ではないですよ。というのも、現在はノビから特殊α線は出ていないのです。」

「へ？どういうこと？」

「3代目ラムダ王が即位したのが32年前のことです。その後、アクサリ家は常に王家としてこのラムダを統治してきたのです。もし、この大いなる能力がすべての衛星に広がっていたら、この地は再び戦場と化していたことでしょう。」

さて、ブルー・アクサリが3代目ラムダ王として君臨したその年、巨大な彗星がどこからともなく現れ、ノビ星系のすぐ近くを通り抜けていった。すると不思議なことにノビから放射されていた特殊α線が確認できなくなったのである。科学者達はこの彗星に原因があると推測しすぐさま調査を始めたのだが、さらに不思議なことにこの彗星がどこから来てどこへ行ったのか誰にも計算できなかったのである。現在はただ記録上でファズアース彗星という名を見つけることができるだけとなっている。

その後の調査で、この特殊α線の効果が顕在化したのはアクサライトのみであり、しかも放射のなくなった現在でもその特殊能力は代々その血でもって受け継がれていった。そして、いつしかアクサリ家はその不思議な能力ゆえに、このラムダ共和国を維持していくことに成功することになる。それは現在の5代目ラムダ王がアクサリ家の出身ということからも分かるだろう。アクサリ家はこの32年間を王家として君臨し、ウインはその中で誕生した純血の王子でもあった。

そして現在、ラムダ他5つの衛星は、トリプタンが引き起こした次元断層に飲み込まれ、衛星8つが同一軌道上を周回するという奇妙な構成となってしまっていた。現国王も病気がちということもあり、人々はここがまた戦場になるではという不安を抱いていた。そこでアクサリ家の侍従長であるグランシーノスが手の者に命じて、この世界のどこかに生存している筈の王子達を捜し始めたのである。そして、遂に5人の王子の一人であり次元管理官でもある第5王子のウイン・アクサリ・ラムダをクロスで見つけたという訳だった。

「そこからの話しは分かるからいいわ。」

「他に説明をしておかねばならないことはありますか？」

「そうねえ、だいたいの謎は解けたんだけど、ウインの生い立ちなんかも知りたいし、とくにパウダーとの関係はまだよく分からないわね。」

「そこまで必要ですか？まあ、仕方がないでしょう。説明しましょうか。」

ウインはアクサリ家の第5王子として生まれると、すぐに親戚筋のセントス家に里子に出された。セントス家はもともとアクサリ家と同じ血筋ではあるのだが、かなり早い時期に他の公家との交流を持ったがために、本家のアクサリ家ほど能力の顕在化はしなくなっていた。そのため、能力を持たないという意味で竜家という称号を持つこととなった分家の一つである。その家のちょうど同じ月に生まれたパウダーと一緒に育てられたウインは、セントス家のユニークな教育により自分の能力をフルに引き出す術を小さくして身につけ、そのもっとも最たる能力が封印だった。

自分の能力を制御することはアクサリ家の後継者にとっては必須課題だった。しかし、ラムダ王の後継者は一つの時代に一人いれば良い訳で、全員が強大な能力を持つ必要がないことは明白だった。そのため、ウインには引き出した能力を自らの能力で封印することが必要だったのだ。しかし、それは口で言うほど簡単なことではなく、その課題を僅か11歳でこなしてしまった時にはセントス家の者は皆、ウインが第5王子であることを残念がった。と同時に、その能力をもっとも発揮する場所として次元管理官になることをウインに勧めた。

パウダーとともに次元管理局に入るためにクロスの中央次元局へ試験のために訪れたのが12歳の時だった。次元管理局でのウインは、その能力のおかげなのか、訓練中にメキメキとその頭角を現し、17歳の時には単独で3B次元層のテラを担当する任務に就いた。もちろん、この年齢で他の次元層に派遣されることは通常ではありえず、未だにこの記録は次元管理局内では破られていなかった。

しかし、その時のテラでの任務でちょっとしたことから相手を傷つけてしまい、自分の能力が両刃の剣であることを悟ったウインは、自らその能力を封印し鍵をパウダーに託したのである。パウダーはそれ以来、常にウインのパートナーとして傍にいてることを自らに課していたが、ウインが極秘任務で3C次元層のジュールへ派遣されるや単独でのアクサライト勤務を命じられ、ウインの封印を解くということもできずに悶々と日々を過ごすことになるのだった。

そして、もう一つだけ、ウインがテラでの任務の際に出会った地球人こそが桂木潤だったのだ。その後、ウインがジュールへ行くことになる重要なきっかけを桂木が作ることになるのだが、その影にレイコがいたことは本人も知らないことである。

ACT VI 「ラムダの歴史」

S61. 7. JAN <<H20. 20. APR>>

ACTⅦ 「ラムダ王の最後の言葉」

はあ、なあんか虚脱感が身体中に充満しているみたい。

あたしは屋根の上に腰掛けて、この小さい町を眺めていた。あたしにとってはこの上もなく遅い夜明けがようやく訪れようとしていて、柔らかな日差しが家々を照らしていた。それなのに、あたしときたら、ウインのさっきの話しが頭の中にウォンウォン渦巻いていて、ちっとも爽やかな気分にならない。

人々はさっきの戦闘にまだ怯えているのか、それとももともと起きるのが遅いのか、もう明るくなってきているのに戸も窓も固く閉ざされていて、誰一人として外に出てくる気配がしない。それだけに、おそらく普段ならそれなりに賑やかなんだろう通りがすごくお寂しそうに見える。

結局、ウインからラムダの歴史を聞いた後、あまりの長い話しに放心しているあたしを置いて、二人はバライナ家の進行が具体的にどこまで進んでいるのかを調査するために出かけていった。中央次元局からの情報だけじゃ不十分だとか何だとか言っていたけど、あの二人の場合は単に自分の目で確かめなくちゃ気がすまない性格なだけって気もする。

なあんか、すべてがみんな面倒になってきた。ウインには悪いけど、いま一つこの戦いには乗り気になれないところがある。たしかにラムダ王に手をかけたことは許せない。けどねえ、もし首尾よくバライナ家を追い返したとしても、結局のところウインが王位を継がなければアクサリ家は王家から公家になる訳で、その後にかかる王家争いを考えればやっぱりバライナ家に落ち着くんだろうし、何のためにバライナ家と戦うのか意味が見出せないんだよね。

ウインが敵討ちをするって言うならそれはそれで納得するんだけど、どうやらそういう雰囲気は無いようだし、あたしにはウインが何と戦っているのかよく分からない。あーあ、このまま地球に帰っちゃおうかなあ。

うーんと手足を伸ばすと気持ちいい。誰も見ていないと思うから屋根の上で大の字になっても、誰にも気兼ねしなくていいもんねえ。…と、ちょうど手を伸ばした拍子に肩に付けていた流星マークのバッジが視界に入る。あの潤がこっちに来る前にくれた通信機能付きとかいうバッジ。でも、本当に役目を果たしているのかどうかはちょっと疑問ってところかな。まあ、今のあたしにとってはどうでもいい物だけど、ちゃんと扱わないと潤が怒るからなあ。

ふわああ、それにしても暇だわ。よおく考えたら、あたしは観光でクロスに来た筈なのに、なんでこんな田舎で暇を持て余してなきゃなんないのかしらね。駄目だわあ、こおんな日当たりの良い所で何もしないで寝転がっていたら、本当に寝ちゃいそうだわ。なんか気の紛れるものはないかしら、この際何でもいいんだけど。

流星マークで思い出したけど、ウインの額にあった妙なマーク。あれはいったい何だったのか聞くのを忘れたわね。たぶん、アクサリ家の紋章なんだと思うけど、酔いつぶれていた時だけ額に紋章が現れて、普段の時は見えていないっていうのが面白いわよね。これはあたしの勘なんだけど、これはウインの能力に関係しているような気がする。そういう意味では同じように額に紋章が現れていたパウダーも一緒ということになる。

それから、あの変な意識はいったい誰の物だったんだろう。結局のところ、ウインもこの件だけは意図的にはぐらかしているようだし、あたしの中では謎のままになっている。パウダーは知っていそうだということは、アクサリ家に関する事なのか、次元管理局に関する事なのか、とにか

くこれが一番の謎という気がする。

うーん、ここまでの情報をちょっと整理してみよう。

アクサライトの人々は、そのほとんどが能力保持者としての潜在能力を持っている。でも、長い年月のうちにそれはあまり表に出ることもなく、大半の人はそんな能力のことを意識していない。理解して使っているのはブルー・アクサリの血を受け継いだ王族の人々だけ。ここで言う王族っていうのは、王家のアクサリ家を頂点とした竜家200あまりを指し、もちろんセントス家もその中に入っている。ウインもパウダーも王族だから、二人とも能力が使えても不思議はない。それゆえにあたしのテレパシーを遮蔽することが可能なのよね。

ここまでは間違っていないと思う。でも、不思議な意識についてはまるで説明がつかない。もし、レイコが復活しているとしてもあんなやり方はしない筈だし、どう考えても別の誰かがあたしに何かメッセージを送ってきたとしか思えない。じゃあ、それはいったい誰なの…？

いくらアクサライトの人間が全員能力保持者だとしても、この次元層であんな強いテレパシーを使える人はそんないない筈。だいたい、あたしでやっと持ちこたえたんだから、並みのテレパスじゃ完全に意識を飲まれていたと思う。可能性のある範囲じゃ王族しか考えられないんだけど、ウインとパウダーは絶対に違うと思うから除外するとして、ウインよりももっと大きな能力を持っている者がいるとすれば、それはたぶん…。

「おーい、帰って来たぜ。いないのかあ。」

ああ、パウダーが帰ってきちゃった。あと少しで答えが出るような気がしたのに。何か重要なことを一つ忘れていたような気がするんだ。それさえ思い出せれば…。

「おい、いないみたいだぜ。あの娘、まさか屋根の上に登っているなんてことはないだろうな。」

どうやらウインも一緒に帰ってきてみたい。もう、しょうがないなあ。ここへ来てからあたしは信用無いからな。また捜されても困るし、とりあえず考え事は一時中止。

あたしは身体の力を抜くと、部屋の中へテレポートした。

「うわっ、おまえさんか。驚かせんなよ。」

「自分で呼んだんじゃない。これくらいでいちいち驚くななんて次元管理官が泣くわよ。それより、城のほうはどうだったの？」

肝心なことを思い出せない苛立ちも手伝って、パウダーにゃ悪いけど刺々しい言い方になっている。

「ああ、城は完全にバライナの兵士に占領されているよ。ローゼンとかいうなかなかやり手の男がいるんだが、今回はそいつの単独行動らしい。どう見てもバライネールでは何も動いている気配がない。」

「アクサリの兵士は何をしたの？」

「グランシーノスのじいさんが王子捜しで留守にしてたしな。不意をつかれてあっという間に崩れたらしい。ましてや、ラムダ王は寝込んでいたしな。」

ラムダ王が元気だったら、なんら問題なかったような言い方…。ラムダ王…。何か忘れてることってラムダ王？

「そうよ、ラムダ王は？ラムダ王はどうだったの？」

「それが…、亡くなったってのは本当らしい。詳しいことは分らんのだが、バライナの兵士に殺されたみたなんだ。まさかとは思ったが…。」

「まさか…？」

病弱でラムダにもいられず、アクサリ城で静養していた王が、元気な兵士に殺された。どう考えたって病弱な王が元気な兵士に敵う筈がないのに、パウダーはあえて「まさか」と言いかけて口ごもった。それはどういう意味なのか、いったいラムダ王というのはどういう人なの？

「そう、まさかなのですよ。あのラムダ王は身体が弱っていたとはいえ、たかが一兵士に殺される訳はないのです。おそらくはローゼンが何か新しい兵器を使ったのでしょう。」

パウダーの後ろで深刻そうな顔をしているウインが初めて口を開いた。

ラムダ王が殺された事実がウインにとっても謎だとすれば、ラムダ王はかなりの能力を持っていたと見るべきよね。だとしたら、ラムダ王にあたしより強いテレパシー能力があっても不思議はないことになる。だんだん、少しずつ謎が解けていくような気がしてきた。

「とにかくな、これは明らかに侵略行為だ。俺は次元管理局本部にこれを報告しなきゃならん。」

「そんなの通信機でするんでしょ？」

「生憎だが通信は使えない。パライナ側に気づかれちゃ何にもならんし、あとで白を切られても困るからな。俺は直接クロスまで行くが、おまえさん達はどうする？」

そんなことをあたしに訊かれても困る。そっとウインのほうを見ると、ウインは何かを考え込んでいるようで、てんであたしの困った状況を気にしてはくれていない。どうしよう…。

「まあ、いいさ。とにかく、俺はザクレスで出るからあとのことは頼む。」

パウダーがあたしと話すのももどかしそうに出て行こうとするのを、それまで考え込んでいたウインがその進路を塞いで立った。

「ウイン…。」

「ザクレスでは危険が多い。私のセカンドプリンターを使おう。」

「クロスへ行くのか？」

「ソルボレーヌに頼んでおいたものが出来ている頃だ。それにもうここにはいない方がいいだろう。」

このウインの台詞で、あたしもクロスに戻ることになったらしいわね。ウインは何かあたしに言おうとして、結局は諦めたらしい。あたしは黙ってウインの横にくっついた。パウダーも同じような格好で反対側にくっつく。ウインはそれを確認して左腕の二次元プリンターを操作する。

目の前で白黒反転が起こった後、あたし達は二次元空間に入っていった。ウインの指し示す方向には道があって、あたし達三人はその道を辿っていく。青白くにも赤っぽくにも光って見えるその道は、どこまでも遠く続いているように感じる。

ガクンという衝撃とともにあたし達は三次元空間に戻った。しかし、てっきりクロスに到着したのだと思っていたのに、ここはまるで雰囲気違って見える。何というか誰もいない無人の街。

「ウイン、クロスに着いたの？」

あたしは周囲を見回していて、パウダーとなんとなく目が合ってしまった。パウダーは肩をすくめて首を横に振る。

「まさか、まだアクサライトから出ていない…とか？」

恐る恐るあたしが質問すると。

「それよりももっと悪いかもな。ここはラムダだ。俺達はまだ二次元空間にいるみたいだぜ。」

「だって、ラムダは…。セカンドプリンターの故障？」

「おそらくセカンドプリンターのエネルギー不足のようだ。どうやら三人同時に転移させるのは無理だったのかもしれない。ラムダの引力に引っ張られてしまった。」

引っ張られてしまった…って言われても、どうすんのよお。

「あなたの能力を借りなくてはならないようです。」

「あたしの能力って言ったって、フェリア以外でのあたしは…。」

「大丈夫。」

ニッコリ笑うウインの顔にちょっと気圧される。あたし、明らかに能力的にウインに負けている。あたしの能力がウインに通じないとかではなくて、この世界ではウインには勝てないということが分かる。せめての救いは、今あたしの目の前にいるのは軽薄なラムダではなく、王子であるウインであることかな。

「オーケー、分かった、やってみる。」

あたしはちょっと深呼吸をして、不意に胸のペンダントに発信機が付いていると言った潤の言葉を思い出した。大丈夫だよ、俺がきっと助けるから…、潤はあたしに何かがあれば必ず来てくれる。そうなんだ、もしあたしが上手くできなくても、潤ならきっとうまくやってくれる筈。

あたしはウインの左腕にある二次元プリンターに意識を集中した。頭で考えるほどそう簡単なこととは思えないけど、とりあえずやってやれないことはないわよね。たとえあたしの能力が100%開放されていなくても…。

エネルギーを吸収しているだろうことは二次元プリンターを見ているとなんとなく分かる。でも、それが作動するのに十分かどうかは分からない。

「これ以上はきついわ。どう、動きそう？」

「いえ、残念ですがまだ十分とは言えないですね。仕方がない、ちょっと離れていますがこの先にある城まで行きましょう。」

ウインの言葉にパウダーも頷いて、そのお城とやらまで行くことになった。幸いにもあたしがエネルギーを入れたおかげでヘルメスへの変形はできたみたい。でも、運転はさすがにきついのでパウダーにやってもらうことにする。

「ねえ、ラムダがそっくりそのまま残ってるってこと知らなかったの？」

「知ってはいましたが、この座標は常に変化しているのです。この時点で私達の目の前にラムダがあるということは予測できませんでした。」

「へえ、次元管理局も実はたいしたことないのねえ。」

「たしかに、私達はこれまでラムダへ行こうとして一度も行けませんでしたからね。」

怒る訳でもなし静かにそう答えるウイン。どうも調子が狂うんだよねえ。こういう時は軽薄なラムダの方がいいかなあなんて思ってしまう。

「どうしました？私の顔に何かついていませんか？」

「う、ううん、何でもない。」

慌ててウインの顔から視線を外して前方を見ると、遠くの方に白いお城が見えてきた。あれがラムダ共和国の中心地でもあったフィラディア城。本当なら人がいっぱいいてもいい筈なのに、ここへ来てからここまで誰にも会わない。ラムダが二次元空間に飲み込まれた時、ラムダにいた人達も一緒にここへ飲みこまれた筈。それなのに誰もいないのはどうしてなんだろう？

「ウイン、フォースゲートにまわるか？」

「いや、その必要はないようだ。おそらく城にも誰もいないだろう。そのままフロントゲートに入ってくれ。」

「了解。」

パウダーは城の正面にヘルメスを突っ込ませると門の前にピッタリとつけた。

本来なら門番がいる筈のその門には今は誰もいない。あたし達は勝手に門を開けると中へ入っていった。広い庭を横切り、これまた立派な玄関から建物の中に入ると長い廊下がひたすら続く。床には真っ赤な絨毯が敷かれ、壁にはあまり趣味が良いとは思えない絵がズラッと並んでいる。そして、廊下の一番突き当たりには二重星に鳥をあしらったアクサリ家の紋章が見える。うす暗くて壁に見えていたそこは実は大きな扉になっていて、あたし達はその扉を思い切り押し開けて中へ入っていった。

あたし達は扉を開けた瞬間にそこに力強い意思を感じて、一斉に一つの方向を見ていた。それは少し高い所にある椅子。まさに玉座そのものがそこにあった。そして、その椅子に腰掛けてこっちを見ている老人。

「父上、どうして…?」

ウインの言葉からすると、この老人がラムダ王。

「ウイン…、第5王子のウインか。よく来てくれた。おお、パウダーも一緒か。もう一人いるようだが、この世界の者ではないな。まあ、よい。三人ともこちらへ…。」

あたし達はお互いに目で頷き合ってから、王の言葉に従い足元に進んで膝間づいた。

「ウイン、わしはもう駄目だ。今後はおまえがこの国を治めるのだ。」

「父上、どういうことです。いったい、アクサリ城で何があったのですか?」

「反乱だ。側近の半分は敵に買収されておった。これはグランシーノスも知らぬこと。城はあっという間に奴らに占拠されたのだ。」

「何故です。父上の能力をもってすれば、あんな奴らに城を明け渡すようなことにはならなかった筈ではないのですか?」

「ESP反射バリアーとやらを完成させていたのだ。もはや、わしの血では対抗できぬ。わしは自分をここへ移すのがやっとだったのだ。」

ラムダ王は悲しそうな瞳であたしを見る。

「もう一度だけ言う。ウイン、おまえがこのラムダ共和国を治めるのだ。頼むぞ。」

「父上!」

ラムダ王はそれで力尽きたのか、ゆっくりと瞳を閉じると揺れる空間の中へ消えていった。いや、ラムダ王だけじゃなくてこの部屋全体がまさに消えようとしていた。

「危ない。また移動を始めたぞ。早く三次元に戻らんと。」

だけど、パウダーの声は聞こえている筈なのに、ウインはジッと玉座を見つめたまま動こうとしない。その目には涙が浮かんでいる。

「ウイン!」

もうほとんど部屋の輪郭がぼやけている。パウダーとあたしはウインの両腕にそれぞれしがみついた。こうなったら無理にでも轉移しなくちゃ助からないかもしれない。あたしは体力が元に戻っていないのを承知の上で意識を集中させようとした。でも、それもウインの声で遮られた。

「セカンドプリンター、オン!」

溢れんばかりの光の渦の中を進みながら、あたしははっきりと理解した。あたしにコンタクトしてきた強い意志がラムダ王であったこと。そして、どうしてあたしを選んだのかを。ラムダ王は分かっていたのだ、ウインが王家を嫌っていたことを。しかし、今となってはアクサリ家の血を継ぐ者はウインしか残っていない。ウインが王冠を継がねば、アクサリ家の王家としての歴史も途絶える。だから、ウインを覚醒させたのだ。あたしを鍵にして…。

一瞬の間を潜り抜けて視界が元に戻る。そこはソルボレーヌの研究室だった。

「おお、これは、誰かと思えばウインではないか。いったい、どうしたのじゃ。」

ソルボレーヌ博士はあたし達に気がつくやうに、手に持っていたフラスコを振りながら近づいてきた。どうやら、何かの実験中だったらしい。

「その王冠は…。そうか、ラムダ王は亡くなったか…。」

いつの間にかにウインの頭の上にはラムダ王が付けていた冠が乗っかっている。ソルボレーヌ博士は、何やら口の中でブツブツつぶやいていたかと思うと、天に向かってクロスを切った。

「ソルボレーヌ、出来ているか？」

その仕草も待ちきれないかのようにウインはソルボレーヌに問いかける。

「もちろんじゃ。そのオミクロンの棚にある銃を持って行くがいい。」

博士はフラスコをテーブルに置くと、自分は別の棚から雑誌大の箱を取り出してきて、それをあたしの前に置いた。

「そして、これはあんたにじゃ。」

「あたしに…？何ですか？」

「ま、開けてみなさい。」

あたしは箱の蓋をそーっと開けた。中には銀色に光る輪が入っている。細い針金状だけど金属ではないみたい。触ってみると暖かいし柔らかい。輪の周りには四つの宝石が四方に付いている。小さくて赤いのが三つに、大きくて青いのが一つ。

「何ですか？これ。」

「そうじゃの、そーいや名前はとくについとらんかったわい。ま、名前なんぞどうでもよいじゃろ。ようはあんたの頭にはめるのじゃ。」

「はめるとどうなるんです？」

「この世界で能力が100%出せんのじゃろ？今のあんたじゃこの二人の足元にも及ばんが、これを身につけることで、ひょっとするとフェリア並みの能力が出せるじゃろうて。」

よく分からないけど、まあ、そういう物なんだろう。あたしはその輪をそーっと持ち上げると、自分の頭の上に乗せた。

「もったきっちりのはめるのじゃ。それから、その青い石が正面に来るようにな。」

乗っけただけの輪を額にピッタリ合う位置までずらしてみる。

「どうじゃ、大丈夫かの？」

「ん、べつにどうってこないけど。」

頭を少し振ってみる。不思議とあたしの頭にピッタリ納まったら落ちる気配はまったくない。これで急に能力が使えるようになったような感じはしないけど、その気になるくらいには効果はありそう。

「じゃあ、行くかあ。」

何も貰えなかったパウダーだけが待ちきれないって感じで立ち上がる。

「ソルボレーヌ、アトリーによろしく言っておいてくれ。」

「ああ、言うとかよ。」

ウインは妙な形の銃を持って階段のほうへ歩き始め、2、3歩歩いたところでちょっと動作が止まる。それから、何もなかったように軽い感じで階段を上っていった。なんとなく、ウインを包んでいた光が変わったように見えたのは気のせいかしら？

あたしはソルボレーヌ博士にペコッとお辞儀をすると、駆け足でウインを追いかけた。

ACT VII 「ラムダ王の最後の言葉」

S61. 15. FEB <<H20. 6. MAY>>

ACTⅧ 「バライネール」

パウダーはクロスにある次元管理局本部へと報告のために行ってしまった。ここでラムダのパートナーは同じ次元管理官のユールという人に代わって、三人でシューザーという円盤状の宇宙船に乗り込む。とりあえずはグランシーノスさんの行方を捜しながらバライネールに向かうと決めていた。

なんか話しくいなあ。どうやら王冠の力でもう一度王子としてのウインを封印したらしい。王冠も使わないと言って、本部に預けてきてしまった。元のラムダに戻ったんなら、もう少し喋って欲しいんだけど、シューザーに乗り込んでからだんまりを決め込んでいて、室内にはキーンという甲高い音が響くだけ。ユールもあまり喋る人じゃないみたいで、こういう雰囲気は今のあたしにはちょっと辛い。

仕方がないんで、目の前にあるモニターを使って航路図なんかを眺めてみるんだけど、これがまた見事に分からない。だいたい、地球にいたらドライブするような感覚で宇宙を気軽に航行するなんてあり得ないものね。

「ところで侍従長を捜すあてはあるのか？」

ユールがこっちに振り返りもせず、いきなりラムダに訊いた。

そうなのよ。だいたいなんで話しくいかって、三人の座席がみんなバラバラの方向に向いているんだもん。つまり、三人ともシューザーの中心に背中を向けているから、互いに顔が見えないのがいけないの。

「はっきり言えないさ。しかし、彼もアクサリ家の人間だ。こういう状況で取るべき行動はおそらく同じさ。」

「と言うと…？」

「ラムダ王が亡くなったことはもうどこかで聞いた筈。アクサリ家から次期ラムダ王が選び出されなければ、その勢力図から考えても次の王家はバライナ家ということになる。しかし、俺が生きていることをじいは知っている訳だ。で、じいがアクサライトを占領しているのがバライナ家の兵士ということに気付けば…どうすると思う？」

クルッと振り返ったその顔は、あたしの知っているあの悪戯っぽい表情をするラムダだった。

「なるほど…、バライネールに行くな…。」

ラムダは前髪をパサットはらうと、なぜか急に立ち上がってあたしのほうへ来る。

「それで作戦なんだが、当然シューザーでバライネールへは行けない。現在の勢力図を考えれば、バライネールまでの航路はこうなる。」

いつの間にか中央にテーブルが現れていた。そのテーブルには星域図が映し出されている。それは、現在ではもう無い筈のラムダが中心に描かれていて、同じく今は存在しないいくつかの衛星も描かれている。

ラムダが指差している航路は、クロスとバライネールを最短で結んだ直線とはほど遠い、大きく迂回した曲線を示す。

「このユエスナーラからラムダ圏に入って、マライロングを抜け、モンキースの脇をってバライネールへ行く。出来ることなら戦闘は避けたいからな。」

ユールも大きくそれに頷く。

「ねえ、そのユエスナーラ、マライロング、モンキースは近くを通っても大丈夫なの？」

「ああ、ユエスン家とマライレス家は元々アクサリ家に忠誠を誓ってくれている公家だからな。ただ、モスカ家はバライナ家側の公家だからすんなりと通してくれるかは難しいところだ。」

あたしは改めて目の前の星域図を眺めてみる。で、あることに気がついた。

「ねえ、じゃ、このカンパノンって衛星は？」

「ん、バライナ側だが今は存在していない。ラムダと一緒に次元断層に飲み込まれたよ。」

「じゃ、こっちのウシュワイヤってのは？」

「それはアクサリ側だけど、それも今は存在していないな。」

ふーん、だとすると…、これがこうなって、この星域には何も存在しないとすれば…、やっぱりこうなるよね。

「じゃあさ、こういう風には行けないかな？」

あたしが示した航路は、カンパノンからラムダの脇を抜け、ウシュワイヤをかすめてバライネールへ行く航路。クロスからバライネールまでほぼ直線のコース。しかも、その間に実際には星は一つも存在しない。

「ラムダの傍を通るのはまだ危険だ。」

と、ユールが声を荒げて反対する。ま、普通に考えれば当然だろう。

「ラムダは二次元空間に飲み込まれたんでしょ。だったら、たとえ同じ座標軸上であってもディメンションの違いでお互いに干渉することはないんじゃない？」

「なんでそんなことが分かるんだ。」

「だって、あたし達、アクサライトからセカンドプリンターを使ってクロスへ行こうとして、途中でラムダに行ったんだもん。」

「どうして、次元管理局のコンピューターでも分からなかったのに…。」

ユールはすごく恐い瞳であたしを睨みつける。まるでコンピューターが答えを出せなかったことを代わりに怒るかのように…。

その間、ジーンと星域図を見ていたラムダが静かな口調で…、ほんとそれまでのユールの喧嘩腰の口調なんてまるで聞いていなかったかのような口調で言った。

「たしかに我々は妙な先入観に囚われていたようだ。ラムダの空域を通ることは可能だろう。だとすれば、カンパノンもウシュワイヤも同じことだ。」

ここで一度言葉を切り、ユールを諭すように力強く頷く。

「俺達はこのルートを行こう。」

ラムダはあたしの提案したルートを指した。ユールは暫く考えてから小さく頷く。しかし、どっちにしたって敵の制空圏を通り抜けなければならないことには変わらない。

「で、お宅に頼みがある訳。」

「ん…？」

「カンパノンまではシューザーで十分行けるんだ。これはほぼ大丈夫と言っていいと思う。しかし、そこから戦闘抜きで行くのはちと辛い。戦闘を避ける訳でもないが、下手に戦って時間を潰したくないというのが本音だ。なんたってこちらは三人で戦う訳だから、いくらなんでもバライナの本体が動いたら一たまりもないだろう。それに、一番厄介なのはローゼンの部隊がバライネールに戻ってくることだ。ESP反射バリアーがどれほどの代物なのかは分からないが、今はまだぶつかりた

くない。」

「分かったわよ。で、あたしは何をすればいいのよ？」

どうも、いつまで経っても遠まわしな言い方は直らないみたい。でも、ラムダが一人で喋っている間にシューザーはカンパノン圏内に入ってしまったからね。いつまでもダラダラ喋られても困る。

「転移して欲しいんだ。ウシュワイヤから一気にバライネールまでね。」

「そんなことくらいセカンドプリンターで出来るじゃない。」

「ただバライネールに転移するだけならね。お宅にやって欲しいのは、じいを探し出してその位置に正確に転移して欲しいんだ。しかも俺を連れてね。出来るか？」

また悪戯小僧のような表情を作って、あたしの髪の毛をクシャッと崩す。あたしはその手を払いのけて大きく深呼吸した。

「やってやろうじゃない。」

「よおし、上等だ。ユール、おまえには貧乏くじを引いてもらうことになるが、このままシューザーでバライネールまで行って欲しい。」

「嫌だって言ったって、もう決めちまったんだろ？」

ユールのこの台詞はラムダに対してというより、ほとんどぼやきに近かったりする。だって、ラムダは既に他のことを考え始めているようで、星域図に集中しているし、ユールにしたって初めから諦めている感じなんだもん。

なんとなく、ユールが可哀想に見えてきた。

「いや、いいんだ。俺は慣れているから。」

あたしの視線に気がついて、慌てて取り繕おうとする姿が余計に惨めだったりして…。

ユールは再び自分のシートにつくと、チラチラあたしを気にしながら大きくため息をつく。ラムダはそんなユールに気づいていないのか、はたまた知っていて知らないふりをしているのか、その辺はよく分からない。

ソルボレーヌさんがくれた頭の上の輪、本当に役に立つんでしょうねえ。

さっきから気になってはいるんだけど、ユールの精神っていうのはラムダに比べると遥かに弱い。そのせいでポロポロ見えてくる部分が多くて、とにかくユールが何かラムダに対して遠慮しているところがあるのはよく分かる。本当はこんなこと気にしても仕方がないのかもしれないけど、ユールのせいか頭の輪のせいか、久しぶりの感覚についつい気になってしまうのも事実。

「ラムダ圏に入るよ。」

ユールがそう声をかけてもラムダは返事をするでもない。なんか本当にユールが可愛そうに感じてきて、思わず衝動的にラムダのお尻を蹴っ飛ばす。

「うわあ！」

星域図を凝視していたラムダは不意をつかれて、テーブルに突っ伏して変な声をあげる。ユールはチラッとこっちを見て、わざとそ知らぬふりを決め込んでいる。どうやら、変に巻き込まれるのを避けているようでもある。

あたしもこれでとりあえずは気が落ち着いたし、関係ないって顔を作って自分のシートに戻った。

「まったく…、お宅の行動にはいつも驚かされるな。」

別段怒るという風でもなく、なんとなく拍子抜け…かな？ま、とりあえずはスッキリしたからいいでしょ。

自分のシートに戻ってもあたしはとくにすることもないので、ボーッと宇宙を眺めていた。大まかなところはコンピューターが全部やってくれるし、細かいところはユールがやってくれるし、決断するのはラムダの役目だし、あたしがここでできることって今のところはどう考えてもないのよ。

と、その時、船内にピーツという高い音が響いた。あたしはハツとしてユールを見る。ユールは困ったような顔をしてラムダを見ていた。ラムダは……。

あたし……？

ラムダは困惑したような表情を作ってあたしを見ている。反射的に自分の肩に手をやると、潤がくれた流星マークのバッジが震動している。正直言ってあたしは慌てた。まさか、このバッジが鳴るなんて思っていなかったから。止め方なんて分かる筈もない。

「どうにかなんない？」

ラムダが肩をすくめて言う。ユールも同じような表情をしている。

「どうしたらいいと思う？」

あたしも莫迦なことを言うもんだ。ラムダに分かるくらいなら苦労はないよね。

「それって、昔、なんか怪獣もののテレビドラマで出てきた奴だろ？だったら、その星の上にあるアンテナがあるんじゃない？」

「うん、本当だ。あるわね。」

「それを引っぱってみたら？」

どうせなす術がないのだ。言われたとおりにやってみたってばちは当たらないだろう。ということで、右手を左肩に回して星の上のアンテナを引っぱってみる。

「やっほー、リン、聞こえるかあ〜。」

潤の声だ……。

「おーい、聞こえないのかあ〜。あれ、おかしいな……。やっぱり、もう少し調整が必要だったか。やばいなあ……。」

なんか急に疲れが出てきた。

「シグマ、元気そうだな。」

「お、その声はラムダか。じゃ、リンは無事にそっちに着いているんだな？」

「まあな……。」

「どうした？何かあったのか？」

「いや、何でもない。」

もう、恥かしいったらありやしない。こんなもん付けてくるんじゃなかったわ。

「どうしたのよ。これ、発信機じゃなかったの？」

「通信機って言ったでしょ。それより、試験が終わったからさ。俺もそっちに行くよ。今どこにいる？」

「来なくていい……。」

「えっ？」

「来なくていいって言ったの。じゃあね。」

あたしはアンテナを引っ込める。どうやら、アンテナを伸ばしている間だけ通信ができるみたい。

「あらら、シグマも可哀想に。」

「せっかくだから呼べばいいのに。」

ラムダとユールが二人して同時に似たようなことを言う。

「いいの、あの人が来ると口うるさいから。」

ラムダは首をかしげてオーバーなジェスチャーを見せる。

…と、また呼び出し音が響く。

「うるさい！壊すわよ。」

言いたいことだけ言うと、潤の台詞を聞かずにアンテナを戻してしまう。

「本当にいいのか？」

「何がよ？」

わざととぼけてみせると、ラムダもニヤッと笑ってそれ以上は追求しなかった。ユールは状況がいまいち把握していないと見えて、しきりとわたしとラムダの顔を交互に見ながら自分のシートに戻る。

ラムダも自分のシートに戻って何かを計算し始めた。あたしは二人がこちらに背を向けたのを確認して、そーっと流星マークのアンテナを伸ばしておいた。

「で、もうそろそろカンパノン圏なんだけどな。」

ユールが誰に向かって言うのでもなく、そのままの姿勢で言う。

「ああ、レイコ、用意はいいか？」

「え…、あ、うん…。」

め…珍しい…。ラムダがあたしのことを名前と呼んだわ。ひよっとしたら初めてじゃないかしら…ね？

「じゃ、ユール、あとは任せた。よろしくな。」

「ま、任せておいてくださいな。」

あたしはそのやりとりを最後まで聞かずに瞑想状態に入った。初めての場所へテレポーテーションをするには、精神を集中するだけでなくかなりの想像力が必要となる。知っている場所なら、その場所をいかに正確に思い出すかで転移先の誤差が決まるのだけど、初めての場所の場合は思い出そうにも知らない訳だからどうしようもないことになる。で、想像力と条件付けを使って転移先の場所を細かく設定しながら透視していく。透視が可能になれば、言うまでもなく見えている場所に行くのと同じで、そこに行くのは容易くなるのね。

まず、最初の条件はバライネールを探すこと。方向は分かっているし、これは目標も大きいから難なくクリア。次に都市、建物、人物と少しずつ条件を増やす。あたしはそのたびにできるだけ細かく想像しながら視野を狭くしていった。何回目かの条件でやっとグランシーノスさんの姿を捉えることに成功した。

「ラムダあ、グランシーノスさん、いたわよ。」

「よし、俺を連れて転移できるか？」

「大丈夫。あたしにしっかりとつかまって。」

あたしの差し出す左手にラムダがつかまる。あたしは一呼吸を置いて、ラムダの手を握り返す。もう、あんな想いをするのはごめんだからね。そして、ゆっくりと頷いてテレポーテーションした。ユールが手を振っているのがチラッと見えて、あとは瞬間的に場面が変わった感じ。

「王子！」

ずばり誤差なし。グランシーノスさんの目前に着地したらしい。周りには数人の兵士も一緒に、

どうやらここはバライナの兵士に囲まれているということが分かった。

「じい、無事だったか？」

「無事でございますとも。ウイン様の戴冠式をこの目で見るとはまだ死ねません。」

「上等だ。じい、状況を話せ。」

おそらく、逃げて逃げて、やっとここまで来て立てこもったんだと思う。後ろは崖で、前と崖の上にはバライナの兵士。地形的にはかなり不利な場所。もう疲れきっている筈なのに、ラムダの姿を見た途端、みんな元気を振り絞っている。

「フラットランドでウイン様と別れた後、じいは宇宙港から船で出たのです。ところが、アクサライトがローゼンの部隊に占領されたのを途中で知りまして、親衛隊の何人かを秘密裏に着陸させて様子を見にやったのです。そうしたら、国王が亡くなられているわ、ウイン様の姿も確認できないということで、取るものもとりあえず親衛隊の者とここへ来たのでございます。」

「よし、分かった。で、じいはウインにはもう会えたのか？」

は…？

「いえ、それがバライネール港に強制着陸しまして、真っ直ぐにバライナ城を向かいましたところ、途中でバライナ正規軍とぶつかったものですから…。」

「小競り合いを繰り返した挙句にここへ逃げ込み、そして囲まれたという訳だ。」

「はあ…、そうでございます。」

グランシーノスさんは大汗をかきながら頭を下げる。

「よし…。」

ラムダは一人で大きく頷くと、あたしにこれまで見せたこともない様な笑顔を作った。

「どうする気？」

「バライナ城へ行く。」

「ウイン様！正気ですか？」

「ウインは話しの分かる男だ。俺が直接話しをする。本当はもっと早くそうするべきだったんだ。」

「しかし…。」

「大丈夫だよ。」

急にオロオロしだしたグランシーノスさんの肩に右手をポンと置くと、ニコッと微笑んで親衛隊の作る壁の外へと出て行く。あたしはチラッとグランシーノスさんの顔を見てから、慌ててラムダの後を追った。

大勢のバライナ兵士の前にラムダは両手を上げて進み出る。あたしは一応申し訳程度に手を上げて、ラムダの後ろからついていった。でも、二人の周囲をシールドしたり、兵士達の意識をモニターしたり、割と見た目よりは忙しいような気がする。

「私はウイン・アクサリ・ラムダ。アクサリ家の五男だ。バライナ家当主、ウイン・バライナと話しがしたい。誰かそう伝えてくれ。」

この瞬間からバライナ側の動きがかなり慌しくなった。十分間ほどはそのままただただろっか、ずーっと同じ姿勢で立ったままのラムダ。背中の方からはグランシーノスさんの不安がひしひしと伝わってくる。周囲には何百という兵士がいる筈なのにシーンとした静寂が流れている。

暫くして銃を構えた兵士が3人ほど前へ進み出てきて、あたし達の前の十メートルくらいの所で向き合う形となった。

「我が当主、ウイン様がお会いになるそうさ。我々と一緒に来て欲しい。」

「ああ、ご苦労さん。」

ラムダはずっと息を止めていたかのように大きく息を吐くと、ゆっくりと手を下ろす。兵士はお互いに顔を見合わせて、改めてラムダの顔を凝視していた。おそらくはそれほどラムダの言動が意外だったんだと思う。とにかく、3人の兵士は今の毒気が抜けたのか、揃って銃口を下ろしてしまった。周囲の兵士達もいつの間にか銃を引っ込めている。

「あ、そうさ。あそこに残っている連中には手を出さないでもらいたい。」

「了解した。部下にはそう指示を出しておこう。さあ、こっちだ。」

リーダ格の兵士がそう答えて、確かめるように振り返りながらこっちへ言うがごとく視線で行く先を示す。

あたしとラムダはそれに小さく頷いて、その3人の兵士の後ろを歩く。いつの間にか他の2人の兵士が横に着き結果として5人の兵士に囲まれる感じで歩いていた。

あたしはバライネールなんて初めてだから実は全然分かっていなかったんだけど、グランシーノスさん達がいた場所ってバライナ城のすぐ後ろだったのよ。崖の上に大きくそびえ立つシルエットがバライナ城だと気づくのにそう時間はかからなかった。

あたし達はグルッと大きく遠回りをしてバライナ城の正面へたどり着いた。バライナ城は全体的に黒のイメージで覆われていて、雰囲気はアクサリ城とはまるで違う。城門をくぐり大きな扉から城の中に入ると目の前には広い階段が広がっている。その階段を登った所は大広間。ここでもおよそ目に付く色というと黒と白しかない。これまた大きな扉を開けて奥の間へ。今度は一転してクリーム系統の色で埋め尽くされている。

その後、あたし達は長い廊下を歩き、今までとは違った制服を着た兵士がいる扉の前までたどり着いた。その扉には金色のヘクサクル中に二本の交差する剣が描かれた紋章が付いている。

「ここから先はお二人でお入りください。」

扉の前の兵士と何か話しをしていた案内役の兵士があたし達にそう告げて頭を下げる。

「ああ、ありがとう。」

ラムダは右手をちょっと上げてそれに応えると、その右手で大きな扉を押し開けて中に入った。あたしもそのままラムダの後に続いた。

そこはまるで外に出たかと思うほどの明るさで、しかも床が芝生だった。壁には…いや、壁は緑で覆われていて見えない。天井は…なかった。あ、違う、ガラス張りなんだ。それでこんなに明るいのか。

「へえ…、噂には聞いていたがすごいもんだ。」

ラムダも感動しているのか、キョロキョロと部屋の中を見回していた。

あたしはてっきりこの部屋に玉座があると思っていたので、余りの意外な光景に気が抜けたのと、この綺麗な光景に感動したので半分半分という感じ。

「あの人達、こんな所に案内して、あたしはてっきり玉座の間に案内されるのかと思っていた。」

「ここって、たしか玉座の間で合っている筈だよ。少なくとも先代の当主が生きていた頃までは…。」

「じゃ、なんで…。」

「そういう奴なのさ。」

「だけど…。」

「おいおい、俺に聞かないでくれよ。どうしてもその理由が知りたいなら、本人に訊いてくれ。」

そりゃそうなんだけど、肝心の本人がいないんだもの仕方が無いじゃない…と言い返そうとしてビクッとしてしまった。嫌だ…いる。おそらくは初めからずーっと、単にあたしが気づかなかっただけ。

どこ…？

ラムダもその気配に気づいたのか、もう一度キョロキョロと捜している。

…と、その時、ほとんど少年の声といった透き通ったような高い声が響いた。

「ようこそ、いらっしゃいました。」

それは一国の王という感じではなく、天使が空から舞い降りてきたような雰囲気、ゆっくりとあたし達の前に姿を現した。

「僕がウイン・バライナ。現在のバライナ国王です。」

ACTⅧ 「バライネール」

S61. 11. SEP <<H20. 3. AUG>>

ACTⅨ 「血の償い」

あたし達の前に立っているのは、どう見ても10歳前後の少年。しかも、色は白く、身体は10歳としても華奢。一見にしてひ弱そうにも見えるけど、その凜々しい顔つきがかりうじて国王という言葉信じさせてくれる。

「久しぶりだな…。」

「まさかこんな形で再開するとは、10年前の僕らには想像できなかったでしょうからね。」

「ああ、そうだな…。」

この辺が未だにあたしの分からないところ。アクサリ家とバライナ家はかなり昔から対立関係にあった筈。それなのになんで顔見知りなのよ。それにバライナ国王の年齢、どう考えても10年前にそれ程の年齢だったとは思にくいんだけど。

「なぜ、あなたがわざわざここへ？」

「兵を引き上げさせて欲しい。」

「兵を送り込んできたのはあなた方のほうだ。違いますか？」

「違う！あの者達は俺がここに捕まっていると誤解したんだ。」

「どうして？僕は何もしていないのに。」

ん？どうも話しが完全にすれ違っているような気がする。あたしにはこの子の意識もラムダ同様にまるで読めないんだけど、嘘をついているんでもごまかしているんでもないことだけははっきりと分かる。

「ねえ、お話し中悪いんだけど、ちょっといいかしら？」

「ん？」

「あのさあ、2人の話を聞いていると、どうやらお互いに勘違いしている部分があるように思えるんだけど、ちょっと分かっていることを整理してみない？」

「勘違いしている部分…？」

あたしが知っている限りでは先に手を出したのはローゼンの部隊。アクサリ城を占領してラムダ王が殺された。グランシーノスさんはそのニュースを聞いてバライナへやって来た。あたし達はそのグランシーノスさんを追いかけてここまで来た。だから、アクサリ城はまだローゼンの部隊に占領されたまま。

「…というのが、あたし達の知っていることなんだけど。」

あたしはとりあえず自分の知っていることを喋ってしまうと、そーっとバライナ国王の反応を見た。バライナ国王は驚くようでもなく、またこの事実を知っていたようでもなく、なんかひたすら考え込んでいるという感じ。

ラムダはというと、そっぽを向いてイライラしている。

「で、どうなのかしら。そちらの知っている事実は何？」

あたしもいい加減イライラしてきて急かすと、バライナ国王はようやく顔を上げた。

「ローゼンはたしかにバライナ軍一級参謀だ。しかし、僕の直属ではない。いや、もちろん逃げるつもりはない。この始末はつける。ただ、この国も色々複雑なんだよ。それだけは理解して欲しい。」

「では、アクサライトの兵は引き上げてもらえるな？」

「バライナ軍は僕の指揮下ですから。しかし、ローゼンの部隊は無理でしょう。」

「よし、ローゼンの部隊は俺がなんとかする。」

なあんだか釈然としないやり取り。一応は認めただろうけど、それだったら一言くらい謝ったっていいと思う。少なくとも何人もの血が流されているというのに…。

「レイコ、行くぞ。」

頭の中で考えているうちにカーッと血が上ってきて、これは一言バライナ国王に言わなきゃ…というところで、いい具合にラムダが気をそらしてしまった。

「あ、うん。」

あたしが返事をした時には、もう既に扉を開けようとしているところ。うわあ、待ってよお…と言おうとした途端。

「ウイン…。」

バライナ国王の小さな声…。その声に反応してラムダの動作がピタッと止まる。そして、ゆっくりと振り返った。

「僕ら、もう、こんな形でしか会えないのかな。」

その言葉は妙に哀しげであり、ラムダに対して発せられたというより、まるで独り言のようでもあった。ラムダはバライナ国王を見つめたままジッと無言でいた。すごく長い時間のようにもあり、そんなに長くなかったかもしれない。ラムダは再び前を向いてバライナ国王に背を向けてしまう。

「そんなことないさ。俺達次第だろ。」

短くそれだけ言うと扉を押し開けスタスタと行ってしまふ。あたしは一瞬の迷いの後、バライナ国王に小さくお辞儀をしてラムダの後を追った。

あたしがラムダに追いついたのは城を出る最後の階段の所だった。ズラッと並んでいる兵士の前を一気に駆け足で通り抜けるのはちょっと恥かしくもあったけど、この際そんなことを気にしている余裕もなかった。

「ラムダあ、待ってよ。いったいどういうことなのか話してもらえるんでしょうね。」

「どういうことも何も、今お宅が見た通りさ。」

まただ…、ラムダの場合、どうして表面はこうもやすやすと他人にさらけ出すのに、内面となるとガードが堅くなるのか。

「じゃ、質問の仕方を変えるわ。なんで対立関係にあった筈なのにお宅とあの国王が知り合いなのよ。それに彼の年齢も不思議だし。」

「ん…。」

不意にラムダは足を止める。なので、あたしもつられて止まった。

「何か誤解しているようだけど、あいつと俺は同い年だぜ。単に幼い頃一緒によく遊んだ仲だっただけだ。」

そして、また歩き出す。もう、ほとんどグランシーノスさんが待つところまで来ていた。

「それに、あの時あいつが一言でも謝らなかったのは、あいつがバライナ国王だからだ。」

「なん…。」

なんで？と言おうとしてやめた。たしかにバライナ国王が謝らなかったことは釈然としていなかったのだけど、あたしが質問する前にラムダが説明したということは、ラムダだって納得できていないということがなんとなく分かったから。所詮はあたしとは住む世界が違うんだもん。理解でき

る訳がない。そういうものなんだと割り切れれば、少しは納得もできる。

しかし、あたしの顔ってそんなに読みやすいのかしら…？それともラムダの能力がそれだけ強いのか、ソルボレーヌさんのくれた輪の性能も不明だし、あたしにとってはそっちの方がよっぽど気になってきた。

「ウイン様、よくぞご無事で…。」

グランシーノスさんは抱きしめんばかりの勢いでラムダの前に走ってきた。親衛隊の中にも安堵感が広がっている。

「まだ喜ぶのは早い。バライナ国王は協力を約束してくれた。ローゼンの手からアクサライトを取り戻すんだ。」

「ウイン様…。」

へえ、さすが…。やっぱり、こういうのは血筋なのかな。さっきまで、グランシーノスさんと親衛隊には疲労の色がありありと見えていたのに、ラムダの一言で急に元気を取り戻したものだ。

「じいは即刻バライネール港に戻って、船でアクサライトへ向かってくれ。」

「ウイン様は…？」

「直接アクサライトへ向かう。」

そう言って左腕のセカンドプリンターを見せる。

「しかし…。」

「心配するな、手は打ってある。じいが出来るだけ早くアクサライトへ来てくれることがこの勝敗を決めるんだ。だから…。」

「分かりました。仰せに従います。」

グランシーノスさんはラムダの話しを最後まで聞かずにお辞儀をすると、親衛隊に向かってサッと手を振ると走り去ってしまった。

「どうするの？一気にアクサライトはきついよ。出来なくはないと思うけど…。」

「シューザーへ一度戻る。今ごろはもうバライナ圏に入っているだろう。」

「了解。」

あたしは精神を集中してユールの意識を掴まえにかかると、さっき星域図を頭に入れておいたから、シューザーの航路の位置を捜し出すのはそんなに難しくはない。だいたい20秒ほどで捉えた。

「行くわよ。」

あたしはラムダの腕を掴むと跳んだ。目の前の風景が瞬間で入れ替わってシューザーの中。

「おかえりい…。」

割とユールがのんびりとした口調で言う。

「アクサライトへ行く。転移できるか？」

「やってみましょ。」

ユールは手際よく目の前のコンソールを操作すると、ジッとディスプレイを眺めている。

「なんだよ、この数は。バライネールからボコボコ船が出てくんぜ。」

「気にするな、あれは味方だ。それより転移は…？」

「行くぜ、酔ったって責任は取らんからな。」

ユールはあたしにウインクを送ってよこすと右腕のセカンドプリンターを…、あれっ？この前は左腕に付いていた筈なのに…、ん？左腕にもある。

「セカンドプリンターが2つ？」

「ん…？」

最後まで言い終わらないうちに幾何学模様があたしを取り巻く。続いてネガポジ反転が起こって、もう一度幾何学模様の攻撃。その後はまばゆいばかりの光の渦が目の前に溢れて、その光の中に少しずつ浮かんでくるアクサリ家の紋章。

あたしは目をこすった。なんでそんなものが見えたのか確認しようとして。でも、錯覚だったのか、光がゆっくりと収まってくると、シューザーの中にはアクサリ家の紋章は見当たらなかった。でも、ラムダの額には時々浮かび上がるか…。

とにかく無事に転移したらしい。あたしが呆けている間にも、ユールとラムダはもうディスプレイを覗いている。

「よく分かんねえな。アクサライトからもボコボコ船が出てくんぜ。」

「気にするな、あれも一応は味方だ。俺達はバライナ軍ではなくローゼンの部隊だけ潰せばいいんだ。」

あたしも自分の席のモニターで映像を見た。何百という船が宇宙に広がり、まるでアクサライトを取り囲むようにしている。そのうちにここへバライネールからの本体が合流するんだろう。

ポヤーツとそんなことを考えながら映像を見ていたら、アクサライトから一筋の光がスーッと伸びてきてレーダーに映っていた船が何台か消えてしまった。

「おいおい、奴さんはいつのまにあんなもんを開発したんだ？」

「向こうにもソルボレーヌみたいなのがいるらしいな。でなきゃ、ESP反射バリアーなんて思いつきもしないだろう。」

「で、おまけが凝縮レーザー砲かい。しかも、あんな特大の…。おお、やだやだ。」

ユールは露骨に嫌な顔をしてみせると、またコンソールを操作して巧みにアクサライトへ近づいていく。レーザー砲の勢いはどんどん大きくなってきて、周りのバライナ軍の船は次々と映像から消えていく。

「ウイン、こりゃ無理だよ。転移しちゃおうぜ。」

「しかしな…。」

「仕方が無いだろう。危険は承知の上でもやる時はやらなきゃ。」

「まあな…。」

ラムダはあくまでも渋い顔。よっぽど何かがかかっているのか、目の前のディスプレイを覗みつけたまま考え込んでいる。

「でも、二次元プリンターは使うなよ。それから、レイコ、一応何が起きてもいいように心の準備をしておいてくれよ。」

お宅と一緒に気の抜ける時ってあったかしら…？と言おうと思ってやめた。だって、ラムダの顔がいつになく真剣そのものだったから。

「ところで、またあたしが転移するの？シューザーごとしていうのはちょっと無理だと思う。」

「分かっているよ。今回は少々危険だが、次元プレジャーを使うことになりそうだ。」

「次元プレジャー？」

「ああ、ユールの左腕にある奴。簡単に言えば二次元プリンターの試作品かな。作動範囲が極端に狭い分、敵には察知されにくい。ただし、転移中の危険度が二次元プリンターの比じゃない。」

「転移中の危険って？」

「お宅がフェリアでやったようなことさ。」

うわっ、嫌なことを思い出してしまった。でも、あの時亜空間で転んだのはあたしのせいじゃないんだからね。

「ユール、二次元プリンターでシューザーを消すと同時に、次元プレジャーで三人を囲めるだけのフィールドを作る。出来るか？」

「出来なきゃ、宇宙の塵となって消えるだけ。」

ユールはちょっとふざけて肩をすくめる。

「これ以上はぐずぐず出来ない。行くぞ。」

ラムダもユールも力強く頷く。そして、その視線は自然とあたしに集まる。あたしはできるだけこの場の雰囲気や和らげようと、とびっきりの笑顔を作って頷いた。

「あたし、これでも幸運の神様ががついているからね。」

うん、やってみなきゃ結果が見えて来ないことならやってみなきゃ。

ディスプレイに映っていたバライナ軍はもう半分くらいまで数が減っている。

「ユール！」

G o ! 心の中で叫ぶ。同時にすべての光が収束し前方に集まってくる。急に床が抜けたような感覚が襲い。あたし達はまるで何もない空間を漂っているような感じになる。でも、実際は物凄いスピードでアクサライトへ向かっている。

「ちょっと、ラムダあ…。」

一つ思い出したことがあったんでそれを訊こうと呼びかけるが、すぐ隣にいる筈のラムダにあたしの声が届かない。

「あのさあ…。」

仕方が無いんで腕を引っ張ろうとしたらスカッとすり抜ける。

「聞こえているんでしょ？」

最後の手段、テレパシーを使って問いかける。

「聞こえているよ。」

「一つ訊いておきたいことを思い出したから。」

「何を？」

「お宅さあ、前に王位を継ぐのが嫌だからぶち壊してくれって言ってたのに、けっこう矛盾したことをしていない？」

「そうかもね。でも、ローゼンのしたことは許せないし、結果としてそれで俺が国王になるのであれば、今はそれでもいいような気がしているんだ。」

ラムダは複雑そうな表情でちょっとだけ笑ってみせる。それが、なぜか前にも見たような気がしてあたしは変な気分になる。

「もうすぐアクサライトだ。今回は俺のためにゴタゴタに巻き込んで悪かったな。」

「何よ、今そんなことを…。」

ラムダはファイと向こうを向いてしまったので、今の台詞の真意は良く分からないままだった。だいたい、普通なら今の台詞はすべてが終わってから言うべきでしょうに。

転移が始まった時とは逆向きに光が分散し始め、身体が持ち上がるような感覚とともに周りの風

景が次第にはっきりとしてくる。城が目の前に見える。アクサリ城だ。アクサライトに帰って来たことが妙に懐かしく感じる。城の中庭に降りた途端、何かに弾き飛ばされたようにあたしとラムダはしりもちをついた。ユール一人が体勢を崩すことなく、銃を構えて目の敵に備えている。

あたし達が体勢を整える暇もなく、まるでシャワーのようにレーザー光線が降り注ぐ。右に左にあたし達は転がって避けているけど、このままじゃ蜂の巣になるのも時間の問題。しかも、ローゼンの部下はわざと狙いを外して遊んでいるのが分かる。

落ち着け、あたしは何のためにここまで来たんだ。ただ逃げるだけじゃ駄目だ。攻めなくては……。

本当はシールドを張って体勢を立て直してから攻撃するつもりだった。でも、余りにも攻めの方に頭があったためにシールドを張るのが遅れた。あたしの手からはどこを狙っているのか分からないエネルギー球が放たれていた。

あたしの手から離れたエネルギー球は不意をつかれたローゼンの部下達を何人か吹き飛ばし、残った残りの部下達は恐怖の余り目茶苦茶にハンドレーザーを撃ってくる。そして、その制御を失ったレーザー光線の一つがユールの心臓を撃ち抜いた。

「ユール！」

あたしとラムダが同時に叫んで、ユールの傍らに駆け寄った。もちろん、2人とも今はシールドを張っている。

「ユール、しっかりとしろ、ユール！」

しかし、心臓を見事に撃ち抜かれたユールは目を開くことはなかった。

「ラムダ……。」

あたしはラムダの腕を掴む。周りにいるローゼンの部下達は無駄ということが分かったのか、ハンドレーザーで撃つのをやめていた。

「凍結させるんだ……。」

「え……？」

「ユールの身体を凍結させてくれ、頼む……。」

喉の奥の方から絞り出すような声で、それだけを言うと膝を折ってジッとユールの顔を見つめている。あたしはやったこともないことを急に言われて少々戸惑ったものの、とにかくやってみなきゃ分からないという開き直りでユールの胸の上にそーっと両手を置いた。

とにかく熱を奪え。あたしなら出来る筈。始めはゆっくりと、そして段々と早く。ユールの身体が急激に冷たくなっていくのが分かる。

「レイコ、あとのことは頼むよ。」

ユールの身体がほとんど凍結したのを確認するとラムダはゆっくりと立ち上がった。同時に敵のレーザー光線も再開する。今度は狙ってきているのが分かるけど、シールドのおかげで貫通することはない。

「どうする気？」

「ローゼンを殺す。この戦いで命の重さを微塵も理解できていないローゼンだけは許せない。」

「待ってよ、一人じゃとても……。」

しかし、あたしの台詞は最後まで聞いていなかった。ラムダはスーッと宙に浮くと、持っていた小型の銃で敵の兵士を一人ずつ倒していく。

「ウイン王子、やめたまえ！」

散開しかけた兵士の後ろから、真っ白い戦闘服で肩の所に金の飾りを付けた男が出てきた。あれがローゼン……。ローゼンの声に反応してラムダの動きが止まる。

「ようこそ、ウイン王子。わざわざ来て頂いて恐縮するよ。」

「おまえがローゼンか？」

「どうかね、私に王位を譲る気はないか？聞けば、あなたは王位を継ぐのを嫌っているそうではないか。兄上達のいない現在、悪い取り引きではないと思うが……。」

「冗談じゃないね。大きなお世話だ。」

「残念だな。あなたを殺すつもりはないのだが。」

「俺も殺されるつもりはないね。だが、ラムダ王の死は、おまえの血で償ってもらうぜ。」

「どうやら、あなたには状況判断能力というものが少々欠けているようだ。」

ローゼンの右手が上がる。ラムダがローゼンを撃つ。兵士のハンドレーザーがラムダに集中する。ラムダは突然落下する。これらのことがほとんど同時に起こったように見えた。一瞬遅れてあたしのエネルギー球がローゼンに向けて放たれた。

「ラムダ！」

今度はラムダのもとに駆け寄ることになる。

「ああ、大丈夫……。」

よかった……。生きてる。

「ローゼンの奴、とうとうESP反射バリアーを出してきやがった。気をつけろよ。」

そのESP反射バリアーのせいでシールドが消えたものの、宙に浮くこともできなくなりレーザー光線からは間逃れた形。あたしの放ったエネルギー球も跳ね返されてとんでもない方向へ飛んでいった。

あたし達が能力を使えば相手が何人いようとあたし達の勝ちだろう。しかし、能力が使えないとすれば、それは完全に物理兵器の差となって表れる。数十のハンドレーザーとラムダの持っている小型銃一丁じゃ、誰が考えたってこちらが不利であることに間違いない。せめて、宇宙にいるバライナ正規軍がアクサライトへ入ってこられれば……。

「はあー、はっ、はっ、はっ、安心して死にたまえ。私が新しいラムダ王だ！」

ローゼンの右手がゆっくりと上がる。

思わず目をつぶってしまった。最後に見たのがローゼンの高笑いする顔だなんてあんまりだ。

次の瞬間レーザー光線が……。あらっ、来ない……。あたしがそーっと目を開く。ん……。何十人ものローゼンの部下達がみんなその場に倒れている。ローゼンは？ローゼンはどうしたんだろう？

「畜生……。最後に美味しいところを持っていきやがって。」

ラムダの怒っているんだか笑っているんだか分からない表情。

そうだ、ローゼンは？あたしは未だローゼンを捜し出せていなかった。いったい何が起きているのかも状況が掴めない。

あたしはローゼンが立っていた場所を見た。ローゼンは右手を中途半端に上げたまま静止している。その後ろには一人の人影。ちょうど逆光でまぶしくて誰だか分からない。そして、ローゼンがゆっくりとその場に倒れる。その後ろから銃を構えたその人が現れる。あたしのよく知っているあの人が……。

「悪いが、俺の大切な人を殺されちゃ困るんでね。」

ちょっと気障なポーズを決めて、およそ似合わない台詞。まったく、あの人は…。

「潤！」

潤は城の階段を使ってゆっくりと降りてくる。

「おーい、無事かあ〜？」

「バカヤロー、後から来たくせして一番いいところを持っていくな。」

ラムダは笑い顔でそう叫び返している。

あたしはホッとして空を見上げた。空にはバライナ正規軍と次元管理局の軍隊が降りてくるのが見えた。

ACTⅨ 「血の償い」

S61. 24. SEP <<H20. 9. AUG>>

ACT X 「戴冠式」

あたしが通信機のアンテナを伸ばした後、潤はあたしの足跡を追い始めたんだそうだ。まず、確実に分かっているソルボレーヌ研究所に行って、ここでソルボレーヌ博士からあたしが輪を受け取ったことを聞いたみたい。それから、そこでの会話の様子などから敵の様子を推測して次元管理局へ向かったとのこと。

次元管理局ではようやく上層部を説得したパウダーが船団を率いて飛びたつところで、潤はそれに乗せてもらってアクサライト上空まで来た。ところがアクサライトの近くまで来たところで、例の凝縮レーザー砲でバライナ軍が次々と撃ち落されているのを見て、それ以上アクサライトに近づくことができなくなってしまった。否応なしにここで待機することになる。

パウダーも潤もこれですごくイライラしたらしい。とにかく、ちょっとでも射程距離内に入るとやられてしまう訳でまったく打つ手がなかったらしい。で、後から着いたバライナ正規軍、グランシーノスさん達一行も加わって一層のイライラ。

ここに至って潤がようやく気が付いた。あたしが通信機のアンテナを伸ばしっ放しにしていることに。で、ユールが倒れ、あたしとラムダも危ないと知ると、後先も考えずにアクサライトに転移したということらしい。あの人、そういう面では見境がなくなるからね。しかも、潤の転移装置はこの次元で使用している物とは根本的に構造が違っているから、ローゼンにもまったく探知されなかったらしい。

うまくアクサライトに潜入した潤とパウダー達は、とにかく一番厄介だった凝縮レーザー砲を壊すと本隊を呼び寄せ、潤の再度の短距離転移でローゼンの真後ろに出現し、まさに右手を上げようとした瞬間に心臓を撃ち抜いたのだった。もちろん、十数名いた筈のローゼンの部下達はパウダーが始末したとのことだけど、どうやってあれだけの人数を一瞬にして倒したのか、本人もよく覚えていないらしい。

その後のアクサライトは大忙しだった。まずバライナ正規軍、次元管理局の船団が次々と着陸し、ローゼンの後始末をつけてくれた。パウダーは一人で走り回ってくれていたと思う。グランシーノスさんは、ラムダ王の葬儀と新ラムダ王の戴冠式の準備でこれまた走り回っていた。ユールは凍結された状態でクロスの中央看護センターに運ばれ、それにはなぜか潤が付き添って行ってしまった。

で、実を言えばみんながこんなにも忙しそうに走り回っているというのに、あたしとラムダだけがすることもなく暇を持て余していた。たまに気分転換に街を歩くことくらいしかすることがない。街の人々は何もなかったかのごとく、ほとんどの人達は普通の生活に戻っている。ひょっとしたら、こういうのは一般市民のほうがたくましいのかもしれない。

いよいよ明日が戴冠式っていう日、いつものように城を抜け出し市街を散歩していた。人通りも多い中央市場の前でラムダが急に足を止める。まあ、2人の散歩にはよくあることなので気にもせず先に歩こうとしたら腕を掴まれた。

「あのさ…、ありがと…。」

ん…？

「あのさ、ありがとって言ってんの。」

「何よ、それ、らしくない。」

どうも、この前からお礼を言われっ放し。それも、だんだんラムダらしくなくなるって感じだし。

「もう言えなくなるからさ。」

そうか…、明日の戴冠式が終わればラムダは正式なラムダ共和国の王となる訳だ。これからはこういう風に気軽に話しかけることもできなくなるんだね。

「ラムダあ、本当にこれでよかったの？王位を継いでしまって後悔はしない？」

「うん、俺もずーっとそればかり考えていた。でも、もういいのさ。お宅にはすっかりと迷惑をかけたけど、今度アクサライトへ来た時には国賓として歓迎するよ。」

あたしは黙って頷いた。やだ、なんだか涙が出てきそう。

ラムダの手があたしの頭の上に…、あん、また髪の毛をぐしゃぐしゃにされるんだ。でも、不思議と今日は嫌じゃない。

「帰ろうか…。」

初めてフェリアでラムダに会った時、なんでこんな軽薄な奴なんだと思った。ここへ来て、本当の姿が封印されていることも知った。でも、やっぱり普段のラムダは軽薄な奴で、何を考えているか分からない奴で、勝手な奴で…。それなのに、どうしてウイン・アクサリ・ラムダという男は、こんなにもいい男なんだよお。

ラムダは今度という言葉を使ったけど、ラムダ王を継いでしまったラムダにまた会えるのを期待する程あたしも莫迦じゃないもん。おそらく明日はこっそりとさよならを言うことになるだろう。もう、地球に帰らなきゃ…。

その後、城に戻ってからは翌日の戴冠式が始まるまでラムダの姿を見ることはなかった。あたしは一応グランシーノスさんの計らいで末席に座ることを許されていたから、割と早いうちから玉座の間には入っていた、そろそろ来賓やアクサリ家の重臣などが入場してきて、場違いな格好をしているあたしだけがやけに目立っている。やっぱり、誰かからこの国の服を借りるべきだったかなあ…。

ファンファーレ！これ以上ないって程の音量で鳴り響く中、正装したラムダが入場してきた。しかし、なぜかその横にグランシーノスさんの姿がない。あたしはてっきりグランシーノスさんが一緒に入場するのだと思っていた。

本来ならばラムダ王の冠は先代の王より直接次の王の頭に乘せるのが慣わしと聞いた。しかし、この国の歴史の中で、きちんとそれができたのは先代のラムダ王の時だけだったらしいけど。今日は先代の王が亡くなっているのだから誰か代理をたてなくてはいけなくて、アクサリ家でそれができる人って王の傍に長年付き添っていた侍従長であるグランシーノスさんしかいない筈なんだ。ラムダもこの部分は常に気にしていたから、この場にグランシーノスさんがいないっていうのはすごく不自然な訳。

ラムダが玉座の前で足を止める。そして、重臣達に一礼する。これは、つまりまだラムダが王子であることを示している。

その時、色違いの制服に身を包んだ一人の兵士がものすごい勢いで玉座の間に入ってきた。たしかあの制服はグランシーノスさん直属の親衛隊だったと思う。

「申し上げます。侍従長グランシーノスより、戴冠式を今暫くお待ち戴きたいとのことです。」

重臣達の間でざわめきが起る。まあ、当然だろう。ラムダはその場に立ったまま玉座を睨みつけていた。

30分ほどすると、今度は各国の代表の席からもざわめきが漏れ始める。おそらく、あの中でジ

ッと静かに待っているのはバライナ国王だけだろう。

そしてさらに30分。ざわめきはこの玉座の間全体を包んでいた。もはやこのざわめきを止めることができるのはグランシーノスさんしかいないだろう。各国の代表からは誰か代理をという声を聞こえ始め、重臣達も何やら相談を始めたように見えた。

そして、あのファンファーレから1時間ほど過ぎたところで、遂に重臣の一人が進み出た。

「ウイン様、これ以上は来賓を待たせることもできません。誰か代理の者を立てて式を進行させませんと…。」

「分かっている。」

ラムダはまだ最初の姿勢のまま玉座を睨みつけていたが、ゆっくりと重臣達のほうに向き直ると凜とした声で叫んだ。

「侍従次長のキーレンをこれへ。」

すぐに進み出たのはグランシーノスさんより若い…、若いと言ってもかなりの年配の人。

「ウイン様、お許し下さいませ。このキーレンには過分の光栄です。出来ますことでしたら侍従長が帰られるのをお待ちくださいませ。」

大汗をかいている。おそらくはさっきから何度となく重臣から代理を務めるように言われていたのだろう。それだけは死んでもできないという決死の覚悟が表情からも読み取れる。

「誰か、このウインの頭に冠を乗せてくれる者はいないか。」

ラムダはグルッと玉座の間を見まわす。しかし、みんな視線を合わせないように下を向いたり、横を向いたり、自ら手を上げようという者は誰もいない。

しかし、考えてみれば当たり前のことでもあるのよね。ラムダの頭の上に冠を乗せるという行為は、それが単にグランシーノスさんに代理ではなく先代のラムダ王の代理ということになる訳だから、こればかりは普通の人なら誰もやりたがらないでしょうねえ。

式が始まったばかりの時のような静けさが広がる中、来賓の席より一人だけ立ち上がった者がいた。

「僕でよければ新ラムダ王のお役に立ちましょう。」

その高いトーンの声が響いた時、この場に参列していた誰しもが自分の耳を疑ったことだろう。だって、そう言って静かに前に進み出たのはバライナ国王ウイン・バライナなんだもん。

「では、お願いする。」

人々のざわめきは最高潮に達した。アクサリ家とバライナ家はこのラムダの歴史の中で長年いがみ続けていた家である。それが、この瞬間に長い争いに終止符が打たれるのだから。つまり、バライナ国王が先代ラムダ王の代理を務めれば、間接的にバライナ家はアクサリ家を王家として認めたことになる。しかも、この状況下ではバライナ国王以上の適任者はどこにも見当たらない。

バライナ国王は侍従次長よりラムダの冠を受け取ると、それをラムダの頭上に高々と差し上げた。誰しもが息を呑む瞬間、外が俄かに騒がしくなった。

「お待ち下さい！ただいまグランシーノスが戻りました。」

親衛隊の一人が言い終わらないうちにグランシーノスさんが飛び込んできた。

「ウイン様の戴冠式を中止いたします。」

え…？あまりのことにみんなの視線がグランシーノスさんに集中する。

「二男クラウナー様が帰城しました。これよりクラウナー様の戴冠式を挙行いたします。」

そこヘグランシーノスさんの親衛隊に囲まれて一人の男性が玉座の間に入ってくる。やはりアクサリ家の正装で、ラムダとそっくりの顔だけどどことなく雰囲気が違う。

みんなの目がクラウナーのほうに向けられた瞬間、ラムダはバライナ国王の手から冠を奪うと、それを玉座に向かって歩いてきたクラウナーの頭の上に乗せてしまった。はっきり言ってあっという間の出来事だった。

「あとは任せませ。」

そう叫ぶとあたしの方に向かって走ってくる。あたしはまだ何が起きたのか分かっておらず、ポーンとクラウナーの頭の上の冠を見つめていた。そんな…莫迦な…。

ラムダはあたしの手を取ると強引に引っぱって城の外まで連れ出した。背後ではようやく新ラムダ王誕生を祝うファンファーレが盛大に鳴り響いている。

「ちょっと、ラムダあ…。」

「はあ、はあ、はあ…、なかなか面白かっただろう。」

「面白かった…って、大丈夫なの？あんなことしちゃって。」

「大丈夫、大丈夫、クラウナーは俺の悪戯には昔から甘いんだ。」

莫迦…、そんなことじゃなくてさ。せっかく王位を継ぐって決心をしたっていうのに…。でも、結局はラムダの思い通りになった訳だし、きっとこれはこれで正解なんだよね。

気が付くとあたし達はパウダーの床屋の前にいた。

「もう、帰るんだろ？」

「うん、いい加減帰らないと心配する人もいるから。」

「元気でな…。」

ラムダの右手があたしの髪の毛をクシャッと崩して…。

「やだ…、今回このパターンばかり…。」

まずい、泣きそう。涙が出るなんてもんじゃないで、本当に泣いちゃいそう。あたしは咄嗟に後ろを向いた。

「ウイン！おまえ、いったい何をやらかしたんだ？」

「へっ？」

すごい大声を上げながらパウダーが城の方から走ってくる。

「おまえさんとこの侍従長から指名手配が回ってきたぞ。」

「なに？！」

パウダーの後ろから潤がヨタヨタと走ってくる。

「おーい、分かったぞ。こいつが侍従長の仕事を取ったんで、それで怒っているらしい。」

「やばい！どうしよう？じいのことまで考えていなかった。」

「逃げるしかないな。」

なんか感傷的な雰囲気が完全にどこかへすっ飛んでいってしまった。

「それじゃ、とりあえず逃げるわ。みんな、元気でな。」

そう言うが早いか、セカンドプリンターを作動させてラムダの姿はかき消すように見えなくなってしまった。残った三人でラムダが消えたあたりを見つめる。

「結局、あいつが王様の柄じゃないってことだけは間違いなかったようだな。」

パウダーの台詞にあたしと潤は思わず吹き出した。

アクサライトの夕陽がゆっくりと沈む。いつの間にかあたしを悩ましていた時差ぼけもすっかりとなくなっていることに今ごろになって気が付いた。でも、そろそろ本当に帰らなきゃね。明日からはまた新しい人生が待っている。

あたしは自分の頭の上にはまっている輪を外すと、ポーンと空高く投げ上げた。それはクルクルと回転しながらどこまでもどこでも高く飛んでいった。

A C T X 「戴冠式」

『**THROW DOWN CROWN**』

— 惑星フェリア・シリーズⅡ —

S61. 27. SEP <<H20. 10. AUG>>